



Title	日本語諸方言を対象にした「性差」研究の展望
Author(s)	高木, 千恵
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2020, 54, p. 47-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91389
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語諸方言を対象にした「性差」研究の展望

高木千恵

キーワード：方言／性差／ジェンダー／ステレオタイプ／規範

1. はじめに

「日本語に性差がある」という言説は広く知られ、またこれに対する批判的な検討もさまざまに行われてきた。その一方で、日本語の地域的変種（地域方言）を対象とした研究でことばの「性差」（話し手の性自認にもとづく差異）が主題となることは多くないようと思われる。本稿では地域のことばの性差を扱ったこれまでの研究を概観し、何がどこまで明らかになっているのか、今後期待される研究はどのようなものであるかということについて考えてみたい。

本稿の構成は次のとおりである。まず2節において、議論の背景である日本語（標準語）の性差の問題について整理する。次に3節で本稿の扱う資料と分析方法の概要を示し、4節・5節で日本語諸方言を対象にした性差研究の動向や問題点について整理する。6節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 日本語を対象とした性差研究について

日本語（標準語）を対象にした性差研究の潮流については、岡本（2011）に簡潔にまとめられている。日本語に本来的に性差があるという前提の下で行われてきた女性語／男性語の研究や、性差があるという言説をジェンダー・イデオロギーの観点から捉え直した研究、また、女性／男性の実際の

話しことばを資料としてそれぞれのことばの実態を捉えることを試みた研究などがある。そこから、「女性／男性」という固定的なカテゴリを設定するのではなく、状況に応じて話し手自身が選択する「自己表現の手段」としての「女性性／男性性」という観点からことばの性差の問題を捉えようとする研究へと発展している。

森山（2019:4）は日本語研究において、「女性のことば」という表現が三つの異なるものを指して使われてきたと述べている。その三つとは、

- (a) 実際に女性によって使われていることば
- (b) 「女性が使う」と考えられているステレオタイプとしてのことば
- (c) 「女性が使うべきである」と考えられている規範としてのことば

である。近年の女性語研究のなかには、(a) に注目し、女性のことばの実態が (b) や (c) とは必ずしも合致しないという事実を指摘しているものもある（現代日本語研究会編 1998 など）。森山（前掲）では (a) を「【女性の言葉】」、(b) (c) の観念上の女性のことばを「〈女ことば〉」として（視覚的にも）区別し、【女性の言葉】の歴史的変遷について考察している。

実態としての【女性のことば／男性のことば】と観念上の〈女ことば／男ことば〉を区別することは非常に重要である。もちろん、〈女ことば／男ことば〉という観念的なものが【女性のことば／男性のことば】を作ることはあり、また実際の【女性のことば／男性のことば】によって〈女ことば／男ことば〉のイメージや規範が形成されることも考えられる。しかしながら、「これは女性の言い方だ」「この表現は男性が使う」と人々に考えられていることと、実際に女性や男性がその表現を使うかどうかということを混同してはならないだろう。

このことをふまえて日本語の地域的変種（地域方言）を眺めたとき、どのようなことがみえてくるだろうか。一つの方言体系のなかに〈女ことば／男ことば〉と呼べるものはあるか。また同じ方言の話し手であっても、それぞれの自己把握によって表現のバリエーションは異なるのか。本稿ではこうしたことを考える一つの材料として地域方言と性差を扱ったこれまでの研究を

概観し、今後の研究について展望したい。本稿の具体的な目的は次の2点である。

- I. 地域方言と「性差」を扱った研究の量的な推移を概観する
- II. 地域方言を対象にした研究が指摘している「性差」の内実を捉える

3. 扱う資料と分析の方法

方言と性差を扱った研究の動向を把握するために、本稿では国立国語研究所のウェブサイトで公開されている「日本語研究・日本語教育文献データベース」（以下「日日DB」と表記）を資料として用いる。ウェブサイト上の「データベース概要」によれば、「日日DB」には、日本語学・日本語教育研究に関わる論文・図書のうち1950年から2019年4月までに刊行された271,000件（2020年2月現在）が収録され、無料公開されている。

この271,000件の研究論文について、本稿では、(1)「性差」にかかるキーワードおよび(2)地域的変種にかかるキーワードの組み合わせによって論文検索（簡易検索）を行い、該当する論文・図書がどの程度あるのか、まずは量的に把握する（分析1）。それぞれの具体的な検索語を以下に示す。

- (1)「性差」にかかるキーワード…女性、男性、男女、性差、男ことば／男言葉、女ことば／女言葉、ジェンダー
- (2)地域的変種にかかるキーワード…方言、地域、弁

簡易検索では、「論文著者名、図書編著者名、論文名、誌名・書名、キーワード・章タイトル」のいずれかに検索語が含まれていれば結果を得ることができる。まずは(1)のキーワードのいずれかを含むものを性差を扱った研究として取り出し、次いで、(1)と(2)キーワードの組み合わせ（27通り）を検索語として簡易検索を行った。(1)の「男ことば」「女ことば」については、「男言葉」「女言葉」の表記でも検索をかけた。また(2)の「弁」は「大阪弁」「福岡弁」など方言を指す表現として使われることがあるため

検索語とした。

得られた結果から、「弁別」「代弁」といった語を含む論文など方言と性差に関する論文に該当しないものについては手作業で除いた。同様に、検索語が書名や発行所名とのみ一致し、論文の内容が検索語とかかわっていない場合も分析対象外とした。

(1) の検索語によって得られた論文・図書のうち、(2) の検索語を含まないものを「性差（のみ）を扱った研究」に分類した。ただし (2) の検索語を含んでいないものでも、たとえば「岡山市における話し言葉の男女差」（尾崎喜光、2017年）のように対象地域を限定しているものについては「男女 地域」のカテゴリに分類した。また、「女性 方言」「ジェンダー 方言」のように検索語の組み合わせが異なる際に同一論文が得られることがあったが、それについて1件とカウントした（結果の詳細は4節参照）。したがって以下に挙げる論文件数は、とくに断らないかぎり「延べ」であり「異なり」ではない。

得られた結果にもとづいて、1950年から2018年までの67年間における論文件数の推移についても分析する（分析2）。期間を2018年までとするのは、2020年2月の最終更新の段階で2019年の情報が4月分までしか更新されておらず、現時点では、残る8ヶ月の間に公刊された論文・図書の情報にアクセスできないためである。

最後に、検索結果として得られた論文から、方言と性差の研究において中心的に扱われているトピックを分析し、研究の流れを概観する（分析3）。

4. 量的な分析からみる研究の動向

本節では、「日日DB」から得られた日本語の性差研究、ならびに地域方言と性差のかかわりを扱った研究について量的に分析する。まず4.1節で全体の傾向を把握し（分析1）、過去67年間における論文件数の推移を4.2節でみる（分析2）。

4.1. 全体の傾向（分析1）

まずは「分析1」の結果についてみていこう。表1は、先述の二つのカテゴリに該当するキーワードの組み合わせによって得られた論文・図書の件数を一覧にしたものである。

表1 性差を扱った論文・図書の件数内訳（単位：件）

		地域的変種にかかる検索語				小計
		(含まず)*	方言	地域	弁	
「性差」にかかる検索語	女性	796	30	22	3	851 (48.05)
	男女	227	21	12	—	260 (14.68)
	ジェンダー	228	2	2	—	232 (13.10)
	男性	151	9	4	—	164 (9.26)
	性差	136	5	10	—	151 (8.53)
	女ことば	81	3	—	—	84 (4.74)
	男ことば	27	2	—	—	29 (1.64)
合計		1,646 (92.94)	72 (4.07)	50 (2.82)	3 (0.17)	1,771 (100)

* 地域的変種にかかる検索語の含まれない論文・図書件数
検索対象 271,000 件。（ ）内の数字は百分率（%）、小数点第三位を四捨五入。

4.1.1. 日本語の性差研究の傾向

表1のうち、まずは性差にかかる7つの検索語によって得られた論文・図書件数の傾向について整理する。検索対象となった1950年1月～2019年4月までに刊行された論文・図書271,000件のうち、性差にかかる検索語によって得られた論文・図書件数は総計1,771件であった。検索語として用いた7つのキーワードのうち論文・図書件数の上位を占めたのは、件数の多

いものから順に「女性」(851件)、「男女」(260件)、「ジェンダー」(232件)で、全体の4分の3がこれらの語にかかわるものであった。なかでも「女性」という検索語によって得られた論文・図書件数は全体の約半数(48.05%)を占めており、「男性」の件数(164件、9.26%)とは圧倒的な開きがある。女性に注目した研究が突出して多いのは、日本語に性差があるという前提に立ち、「普通の（あるいは、男性のことば」と比べて女性のことばにどのような特徴があるか、あるいは、本当に女性のことばに違いがあるかを探る研究が行われてきたことを示していると思われる。

4.1.2. 地域的変種の性差研究の傾向

性差研究の論文・図書として得られた1,771件のうち、地域的変種にかかわる検索語が含まれていたものはわずかに125件（「方言」72件、「地域」50件、「弁」3件）であった。性差を扱った研究において地域的変種との関係を取り上げているものが非常に少ないとことがわかる。また、日本語の性差研究のなかで地域的変種にかかわる検索語が含まれない論文・図書（表中、「(含まず)」と表示してある列）の件数と比較すると、「女性」という検索語によって得られた論文がもっとも多いという点では一致するものの、その次に多い「男女」の論文件数との差は小さい（「女性」55件、「男女」33件）。加えて、地域的変種にかかわる内容を含まない性差研究では「ジェンダー」をキーワードとする論文・図書件数が第3位(228件)であるのに対して、地域的変種を扱う研究では4件を数えるのみである。「日日DB」のデータをみる限りにおいて、ジェンダーの観点から地域的変種を捉えようとする試みはまだほとんどなされていないことが窺える。

4.2. 過去67年間における論文件数の推移（分析2）

次の図1は性差を扱った論文・図書の件数の推移をしたものである。1950～2018年の67年間における性差研究の論文・図書の増加傾向がよくわかるが、いくつか、その前後の年よりも件数が顕著に多い年がある。これは、日

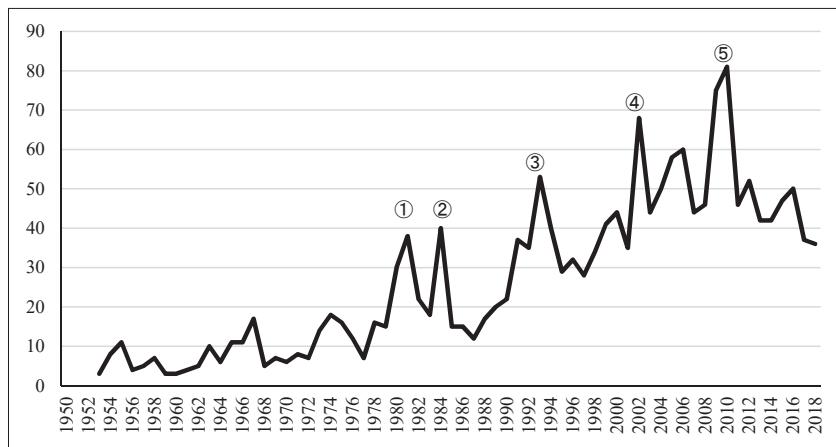


図1 1950年～2018年までの「性差」論文・図書件数の推移（単位：件）

①1981年：『ことば』（現代日本語研究会）特集「辞書にみる女性」、②1984年：『言語生活』特集「女性とことば」、③1993年：『日本語学』特集「世界の女性語　日本の女性語」、④2002年：『日本語学』特集「日本のジェンダー・スタディーズ」、『男性のことば　職場編』（ひつじ書房）刊行、⑤2010年：『世界をつなぐことば』（三元社）刊行。

本語・日本語教育関連の雑誌で性差研究の特集が組まれたり、性差研究の論文集が刊行されたりした年である。

図中①は1981年で、現代日本語研究会の雑誌『ことば』において「辞書にみる女性」の特集が組まれた年である。②の1984年には『言語生活』（筑摩書房）で「女性とことば」の特集が、また『翻訳の世界』（日本翻訳家養成センター）で「女性を解く、翻訳」と題した特集が組まれている。③の1993年には『日本語学』（明治書院）で「世界の女性語・日本の女性語」の特集が、その2年前の1991年には『国文学　解釈と鑑賞』（至文堂）で「ことばと女性」の特集が組まれている。④2002年は『日本語学』に「言語のジェンダー・スタディーズ」の特集があり、また『男性のことば・職場編』（ひつじ書房）が刊行された年でもある。⑤の2010年には論文集『世界をつなぐことば—ことばとジェンダー／日本語教育／中国女文字』（三元社）が刊行されている。このように性差を扱った論文・図書の数は、年代ごとにい

くつかのピークを作つて増減を繰り返しつつ、全体として増加していく傾向にあったことがわかる。

しかしながら、性差研究をテーマとした論文・図書件数の増加傾向が今後も続くかどうかは見通せない状況である。というのも、論文件数の年代別平均値を取つてみると、1950年代から2000年代まで増加の一途を辿つていたものが2010年代には減少に転じているからである（4.6 ポイント減、表2参照）。ただし今回のデータには2019年分が含まれておらず、2010年代のみ9

表2 年代別にみた論文・図書件数平均値*（単位：件）

年代	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010
論文・図書件数 (平均値)	4.1	7.9	11.9	22.7	35.1	52.4	47.8
前の年代との差	-	+3.8	+4.0	+10.8	+12.4	+17.3	-4.6

* 2010年代分のみ2010年～2018年までの9年分の平均値（小数点第2位を四捨五入した）。他はいずれも10年分の平均値。

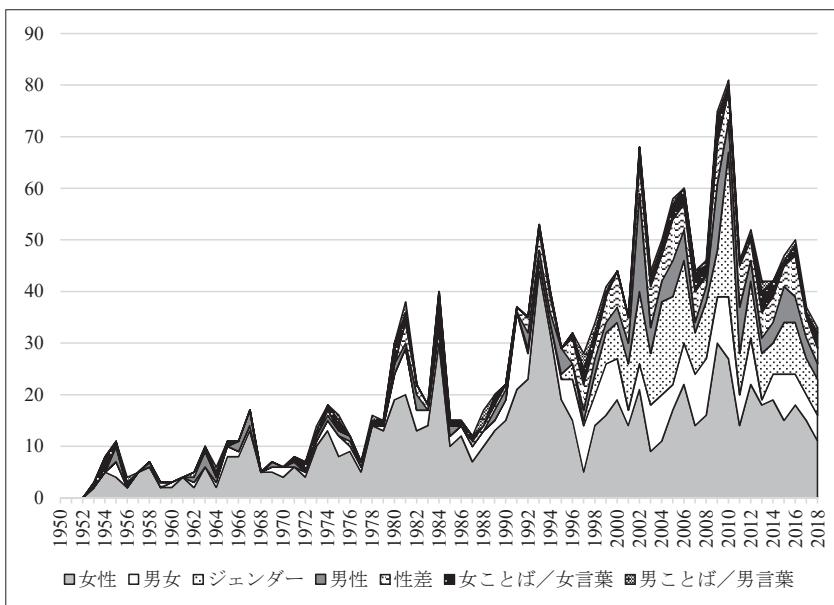


図2 1950年～2018年までの「性差」論文・図書件数と検索語の推移（単位：件）

年分の平均値となっている点には留意すべきである。平均値の減少がこのことに起因している可能性もあることから、今後検証する必要がある。

さて図2は、検索語別にみた性差研究の論文件数の推移を積み上げ式の折れ線グラフで示したものである。件数の少ない検索語の動向についてはやや見えにくくなっているが、ここで注目したいのは「女性」と「ジェンダー」の動向である。1950年代から2018年まで「女性」をテーマとした研究が一定数を保っている一方、「ジェンダー」を扱った研究は1990年代後半から2010年代にまとまって分布している。「日日DB」で「ジェンダー」という検索語によって得られるもっとも古い論文は1976年の「特集・性とことば—ジェンダーとセックス—」(五島忠久、『言語生活』294)であるが、その次に得られるのは1992年の「コミュニケーションとジェンダーポリティクス」(小倉千加子、『コミュニケーションと人間』1、愛知淑徳大学コミュニケーション学会)であり、約20年の隔絶がある。

地域方言と性差を扱った研究の推移を示したものが図3である。図3が示すとおり、1950年からの67年の中で該当する論文の件数が10件を超えた

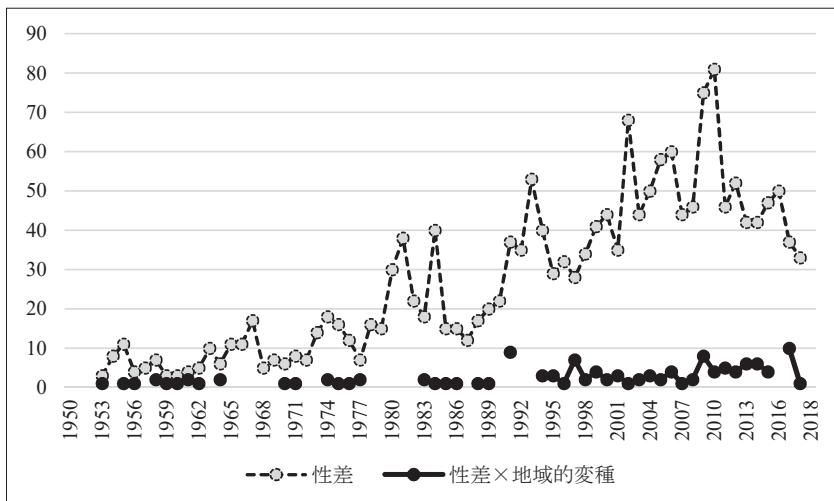


図3 「性差」論文・図書件数と「性差×地域的変種」論文・図書件数の推移
(1950～2018年、単位：件)

表3 年代別にみた「方言×性差」の論文・図書件数平均値*（単位：件）

年代	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010
論文・図書件数 (平均値)	0.6	0.5	0.8	0.6	1.9	2.6	3.8
前の年代との差	-	-0.1	+0.3	-0.2	+1.3	+0.7	+1.2

*各年に得られた異なり件数によって算出。2010年代分のみ2010年～2018年までの9年分の平均値（小数点第2位を四捨五入した）。他はいずれも10年分の平均値。

年はなく、性差研究に追随して増加していく様子はみられない。1年に8～10件の論文件数が認められたのは1991年（9件）・2009年（8件）・2017年（10件）の三つの年であるが、それぞれを小さなピークとみるのは難しい。というのも、この結果は同一論文が異なる検索語によって重複して得られたことによるものであり、異なり件数でみるといずれも突出して多い年とはいえない。とくに1991年と2017年は延べ件数がそれぞれ9件・10件に対して異なり件数ではどちらも5件しかない（2009年は延べ8件・異なり7件）。

ただ年代別の平均値をみてみると、わずかではあるが1990年代以降漸増傾向にあるようにもみえる（表3、異なり件数によって作成）。性差研究の論文件数の平均値が減少に転じている2010年代においても、地域方言と性差を扱った論文件数の平均値は上昇している（1.2ポイント増）。今後、日本語の性差研究から得られた知見を援用して方言と性差の関わりを追究する論文が増加することも考えられるだろう。

5. 地域方言と性差の研究（分析3）

本節では、地域方言と性差を扱った研究が具体的にどのようなことを取り上げているかについてみていく。前節で述べたとおり、地域方言と性差のかかわりを扱った研究自体が非常に少ないのであるが、それだけでなく、性差がキーワードとなっている場合でも方言保持や使用の度合いにおける男

女差・方言の変化過程にみられる男女差など「方言内部の性差」の追究とは異なるものを主題としている研究が目立つ。日本語（標準語）の性差研究にみられるような、使用者属性にもとづく表現のバリエーション（の有無）を扱った研究はさらに少なくなるのである。

5.1. 方言に性差はないのか

方言の性差を対象とした研究が少ないのには、一つには、言語的事実として話し手の性別によることばの使い分けがない、あるいは少ない、という理由が考えられる。たとえば真田編（2006）は次のように述べている（下線は筆者による）。

本当に日本語の全体に性差があるのであろうか。その性差は近代になつてから標準語のレベルのものにのみ生じたものなのではなかろうか。日本語に本来的に性差が存在するという主張には、編者は少なからず疑問を抱いている。

（真田編 2006:6）

実際、熊本市内方言の〈女ことば〉の収集を試みた馬場ほか（2017）は、聞き取り調査の結果として「確立した女ことばというのは見あたらない」（p.145）と述べている。また「日日DB」には登録されていない論文であるが、ジェンダーの観点から高知県土佐方言の談話資料の分析を試みた池澤（2009）においても、呼称を除いて女性語（池澤論文では「女性性標示形式」と呼べるもの）なく、基本的に男女ともに共通の言語形式を使用していること、男性語（同、「男性性標示形式」）と呼べそうなものがあるにはあるが、限られた場面・文脈においてしか使用されないことを指摘している¹⁾。

5.2. 方言内部の性差についての指摘

その一方で、各地方言の概説などに性差に関する記述がみられるのも事実

である。『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂）1991年7月号の特集「ことばと女性」には、山口幸洋・木川行央・田尻英三・名嘉真三成の4氏が各地方言にみられる性差をテーマに寄稿している。このうち山口（1991）は日本の方言について「男女差にかかわる言語形式が体系的に整っている方言」と「男女差にかかわる形式がほとんどないという方言」という二つの典型を挙げ、東海地方にはその両方が存在すると述べている²⁾。同誌において木川（1991）は関西（兵庫県西脇市）方言を、田尻（1991）は九州方言を、名嘉真（1991）は琉球方言をそれぞれ扱っているが、いずれも性差の存在を認めている。木川（1991）は本文のなかで、『国語学大辞典』（1980年、東京堂）の「日本の方言」の項において近畿方言が「男女のことばのちがいがはっきりしている方言」と述べられていることも紹介している。

このほかに本堂（1970）は、秋田・青森・岩手の北奥羽方言域で行った臨地調査・通信調査の結果から「絶対女性語」（女性だけが使う語）とみなされている表現形式があること・地域によっては「絶対女性語」「相対女性語」（男性よりも女性が多く使用する語）とみなされる表現形式が認められないことなどを明らかにしている。方言を対象に、実際の女性専用語（【女性のことば】）ではなく意識のうえでの女性専用語（〈女ことば〉）の存在を話者の内省から捉えようとした興味深い研究である。

実際に収集したデータから方言内部の性差を捉えようとした論文もある。村中（2001）は大阪府東大阪市をフィールドに表現法全般に関する面接調査・ロールプレイ調査を行い、得られた結果のうち命令表現にかかわるものを見た。そのなかで、男性と女性とで回答される形式に違いのある場合があることを指摘している。また山下（2011）は滋賀県の湖東方言・湖西方言についてグロットグラムのデータから各地の回答における性差を分析し、伝統方言形が男性に選好されやすいこと、待遇表現形式においては女性の方がより高い待遇価値をもつ形式を回答する傾向にあること（ただし若年層では性差が小さくなること）など、方言を含めた表現形式選択のあり方に性差のみられることを指摘している。

5.3. 方言を対象とした性差研究の問題点

ここまで、方言を対象とした性差研究を概観してきたが、問題点として挙げられるのは次の2点である。一つは森山（2019）が日本語の性差研究について指摘したこととほぼ重なる。すなわち、ジェンダーステレオタイプやジェンダー規範としての〈女ことば〉と、女性が実際に日常生活において使用する【女性のことば】の区別が曖昧なままに記述されたり、論じられたりしている場合がある点である。方言内部の性差について指摘されているところの多くが、「ぞんざいな表現なので女性は使用しない」「やさしい表現で女性に好まれる」といったような、観念上の〈女ことば〉についての認識を反映させた記述となっている点には注意したい。仮に「○○という言い方は女性はしない」「△△は女性の言い方」といった報告が話者から得られたとしても、それが現実を反映したものであるとは限らない。ここから得られるのは「○○という言い方は女性的ではない」あるいは「△△は女性の言い方である」と認識されていることである。またたとえば「～をこの土地のことばでどう言いますか」のような方言翻訳式によって得られた回答に男女差があったとして、それもやはり使用意識における性差であるという点は留意すべきである。岡本（2011）が日本の性差研究について「データは質問形式によるものが多く、その結果は規範意識を理解するのには有益であるが、実際の言語使用と同一視できない」（p.234）と述べているが、この指摘は方言研究にも当てはまるだろう。

二つめは、話し手の性別を「女性」と「男性」に二分し、それぞれが均質的な集団であるかのように捉えられてきた点である。性差研究において（あるいは社会言語学的研究において）【女性のことば／男性のことば】がいかに多様で、個人や文脈、場面による違いをはらんだものであるかが明らかにされている現在³⁾ 方言の性差研究においてもそのような「集団内部の差異」に積極的に目を向ける必要があるのではないだろうか。話し手を女性と男性に分けてその結果に表れた差異を性差とみなし、ジェンダーステレオタイプ

やジェンダー規範にもとづいて分析するだけでは、研究者の意図せざるところでジェンダーステレオタイプの再生産に与することになりかねない。

5.4. 方言を対象とした性差研究のこれから

以上をふまえたうえで、方言を対象としたこれからの性差研究のアプローチとしては次のようなことが考えられる。

- (a) 方言における観念上の〈女ことば／男ことば〉の整理
- (b) 上記 (a) と実際の【女性のことば／男性のことば】の対照
- (c) 実際の【女性のことば】と【男性のことば】の対照
- (d) 【女性のことば／男性のことば】の多様性の記述

いずれも、日本語における性差研究（あるいはことばとジェンダー研究）の蓄積がすでにあるものであるが、地域方言を対象とした場合にどのようなことがいえるのか、ジェンダーステレオタイプやジェンダー規範を批判的に検討しつつ、話し手の能動的な言語実践を観察することで得られる知見があるものと考える。

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語の地域的変種を対象にした性差研究の展開を概観し、これから的研究についても展望した。2節で示した本稿の目的を再掲し、本稿が指摘したことをまとめて示す。

I. 地域方言と性差を扱った研究の量的な推移を概観する

→日本語の性差を扱った研究が年々増加傾向にある一方で、地域方言の性差を主題に据えた研究は非常に少ない。ただし今後増えていく可能性もある。

II. 地域方言を対象にした研究が指摘している性差の内実を捉える

→性差のある方言とそうでない方言とがあるという指摘があるが、「ある」とされているものの中にはジェンダー・ステレオタイプや

ジェンダー規範を反映させたものが含まれており、注意が必要である。話し手の使用意識を尋ねるだけでなく、実際の言語使用実態をみていく必要がある。「女性／男性」を均質的な集団とみるのではなく、「多様な女性／男性」の存在を前提としたアプローチが必要である。

日本語（標準語）を対象にした、話すことば資料にもとづいた【女性のことば】【男性のことば】の研究アプローチを援用しつつ、方言内部の性差（の有無）について、観念上の〈女ことば〉〈男ことば〉から切り離されたかたちでの記述を蓄積することが求められる。

なお、本稿では検討する余地がなかったが、方言の使用そのものがジェンダーとかかわるという指摘もある（熊谷 2009；2010, 岡本 2011）。この点については方言に対するイメージ調査などの蓄積がすでにあるが、ジェンダー（あるいは自己標示）という観点から方言と標準語の使い分けをみていくこともできるのではないかと思う。今後さらに考えていきたい。

[注]

- 1) ただし、馬場ほか（2017）、池澤（2009）ともに分析のしかたに疑問の残るところもあり、さらなる調査研究が必要であると思われる。
- 2) 山口（1991）は前者として静岡県浜名郡新居町方言を、後者として静岡県磐田郡水窪町方言を例に挙げている。
- 3) この点については岡本（2011）や高野（2011）において簡潔に整理されている。

[引用文献]

- 池澤明子（2009）「土佐弁におけるジェンダー標示」『日本語とジェンダー』9 https://gender.jp/journal/backnumber/no9_contents/ikezawa/ (2020年3月20日閲覧)
- 岡本成子（2011）「言葉とジェンダー研究の新たな展開」『日本語学』30-14、明治書院
- 木川行央（1991）「方言にあらわれた男女差—西日本方言（関西）」『国文学 解釈と鑑賞 56-7、至文堂
- 熊谷滋子（2009）「方言が亡びるとき—新聞投書から読み取る方言観の変遷を追う—」

『人文論集 静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告』60-01

熊谷滋子(2010)「方言の歴史」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社

現代日本語研究会編(1998)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

真田信治編(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版

高野照司(2011)「バリエーション研究の新たな展開」『日本語学』30-14、明治書院

田尻英三(1991)「方言にあらわれた男女差—西日本方言(九州)」『国文学 解釈と鑑賞』

56-7、至文堂

名嘉真三成(1991)「方言にあらわれた男女差—琉球方言」『国文学 解釈と鑑賞』56-7、

至文堂

馬場良二・吉里さち子・宮村葵(2017)「熊本市内方言におけるジェンダーについて—

自然談話資料の分析から—」村里好俊編著『女性・ことば・表象—ジェンダー論
の地平—』大阪教育図書

本堂寛(1970)「文頭表現・文末表現に示される女性語意識—主として北奥方言について—」『国語学研究』10、東北大学文学部『国語学研究』刊行会

村中淑子(2001)「大阪方言における命令表現について—臨地調査と文献資料比較—」
『徳島大学国語国文学』14

森山由紀子(2019)「言葉の性差の背景とゆくえ」田中牧郎編『現代の語彙』朝倉書店

山口幸洋(1991)「方言における男女差—東日本方言」『国文学 解釈と鑑賞』56-7、至文堂

山下暁美(2011)「方言の使用における男女差—滋賀県を例に—」『明海大学外国語学部
論集』23

[参照ウェブサイト]

国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/ja/> (2020年9月6日閲覧)

[付記]

本研究はJSPS科研費基盤研究(A)「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」(2020～2025)(研究代表者・日高水穂)の助成を受けたものである。

(文学研究科准教授)

SUMMARY

A Review of Studies on Gender Differences in Japanese Dialects

Chie TAKAGI

This paper reviews studies dealing with regional varieties and gender differences in Japanese. The belief is well known that Japanese has gender differences, and so far there has been much discussion about this. Some researchers show the negative results but others support the existence of gender differences in Japanese. However, most of their research focus on the Standard Japanese but not on regional linguistic varieties in Japan. In this study, we searched the papers on the Japanese bibliographic database provided by the National Institute of Japanese Language (NINJAL) in order to understand the research trend of the relation between dialect and gender. The search for papers was done by several combinations of multiple keywords such as “female and dialect”, “gender and region”, and so on. The results were analyzed both quantitatively and qualitatively.

As expected, the number of papers focusing on dialects and gender turned out to be much smaller than those dealing with Standard Japanese and gender. The reason may be that Japanese dialects have little or no gender differences, or that there are no new findings beyond what was pointed out in previous studies of Standard Japanese and gender. In fact, some papers reported that the dialects they focused on had no specific forms marked gender difference, and others just confirmed the previous findings. But the biggest problem is that most of these studies did not make a distinction between gender norms/ gender stereotypes and the actual utterances used by female and male. In order to fill the lack of studies, it is required to describe the gender differences in the actual speech of dialect speakers, not the ideological language differences between female and male. Furthermore, the importance is to conduct research that pays attention to the diversity among females/males since they are not a homogeneous group, but a group with social heterogeneity.